

論 文 要 旨

氏 名 李天然

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

佐藤春夫と中国近代文学

論文要旨（別様に記載すること。）

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、CD等の電子媒体（1枚）を併せて提出すること。
（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。）

要旨

本研究は佐藤春夫と中国近代文学との関係を全面的に把握することを目的とする。この目的に達するために、本研究は(1)佐藤春夫と中国作家との交友、(2)佐藤春夫と中国作家の相互翻訳と紹介、(3)佐藤春夫の創作が中国作家に及ぼす影響、最後に(4)近代中国を含む現実の対象に向ける佐藤春夫の視線における中国古典の影響、という四部構成でそれぞれ考察を加えた。

第一部では佐藤春夫の1927年の中国旅行を取り上げ、佐藤春夫の旅行記から北伐戦争の間の郁達夫と田漢の南京国民政府に対する態度の相異、またそれが佐藤春夫の二人に対する態度にもたらす影響を考察した。

第一章で佐藤春夫の旅行記「西湖の遊を憶ふ」(『セルパン』1935年9月)について考察した結果、そこには郁達夫の「日記九種」の影響が認められる一方、佐藤春夫の郁達夫に向ける視線には儒家の伝統的な文人像への憧憬が現れていることが明らかになった。佐藤春夫は北伐戦争における郁達夫の軍隊批判や南京政府に対する非協力的な態度を旅行記の中で強調しているが、それは彼が郁に北宋時代の文人林和靖のイメージを重ねたからだと考えられる。そして郁達夫の反政府的な一面に対する過度な思い込みは戦時中に郁が政府に協力したことに対する失望につながり、それがのちに国策小説「アジアの子」を生み出す原因になっていると考えられる。一方、佐藤春夫は旅行の間に目撃した郁達夫と王映霞との恋に強く興味を持ち、「西湖の遊を憶ふ」において虚構の再会場面で二人の恋を中国古代の才子佳人小説に倣って描いたこと。このように佐藤春夫の郁達夫に向ける視線に中国古典の影響が強く伺える。

第二章では「曾遊南京」(『改造』1937年11月)と「南京雨花台の女」(未発表)を中心に、佐藤春夫の南京体験を考察した。「西湖の遊を憶ふ」にみられる郁達夫の軍を嫌う隠者の姿と対極的に、「曾遊南京」のなかで田漢の役所での行動や彼の映画処女作の初公開の場面などに対する描写によって彼の南京国民政府の役人としての姿が浮き彫りになる。そして田漢によって案内される佐藤春夫は時局や政治に対する無知と当時の南京に漂う反日的な雰囲気を感じ、旅行の中に強い疎外感を覚えた。この疎外体験の反動として書かれたのは戦時中に創作した未発表の小説「南京雨花台の女」である。「南京雨花台の女」のなかで佐藤春夫は井上紅梅の経歴を参照しつつ疎外される体験の反動として南京に没入するもう一人の「自分」を描いた。

第二部分では佐藤春夫と近代中国作家との相互紹介と翻訳について考察した。

第三章では戦前における佐藤春夫の中国語訳について考察した。佐藤春夫の作品は五四運動後の日本文学翻訳の潮流のなかで中国に紹介されたが、その翻訳と紹介には彼が1920年の台湾、福建旅行以降に樹立した中国文化の理解者という名声によるところが大きい。1920年代前半の翻訳は周作人を中心とする知人の間で行われる傾向が著しく、また佐藤春夫は詩人か小説家かという問題において意見が分かれている。1920年代後半における翻訳は1927年の中国旅行や谷崎潤一郎との間の細君譲渡などに対するマスコミの報道に拍車をかけられてさらに盛んになるが、1931年以降は日中関係の悪化によってその翻訳も下火になる。以上の経緯は、文学作品の翻訳に関与する多様な要素の影響を鮮明に示しているといえる。

第四章では1934年11月の『文藝春秋』に掲載された「蘇曼殊とは如何なる人ぞ」を中心に佐藤春夫による蘇曼殊の紹介を取り上げた。この部分ではまず佐藤春夫と同時代の他人による蘇曼殊紹介を整理し、佐藤春夫は「混血児説」に強い関心を持つ点において日本人の血統に着目する同時代の蘇曼殊紹介と異なることを指摘した。佐藤春夫の優れた蘇曼殊理解は彼と田漢や増田渉との交友や、魯迅と周作人など中国作家による蘇曼殊理解によ

る影響もあるが、最も根本的な原因は彼自身がアイデンティティーの不安を抱える人間として、蘇曼殊の人生と芸術の根底にある存在の不安を見出し、彼を一人の藝術上の血族として認めたからである。この部分の後半で筆者は二人の代表作である「田園の憂鬱」と「断鴻零雁記」を比較し、二人の文学にみられる虚構の「フルサト」への追及における共通点を指摘した。

第三部では佐藤春夫の「田園の憂鬱」を中心に、佐藤春夫の作品が中国文壇における左翼作家の間に影響を及ぼす可能性について論じた。

第五章では 1920 年代後半から中国文壇で活躍した左翼作家馮乃超の前期作品『紅紗灯』を取り上げ、その中に収録された「薔薇、汝やめり」という組詩が表象の運用、場面描写、さらに詩の構造において『田園の憂鬱』との間に共通性が認められるということを示した。1920 年代の中国文壇において佐藤春夫は単なる小説家よりも「詩的な小説家」或いは「詩人」として評価されることが多かったため、馮乃超が佐藤春夫の小説から詩想を得ることは自然ともいえるだろう。もちろん、「薔薇」、「ランプ」、「雨」、「不眠症」などの表象は西洋の唯美主義作家の創作の中にも多く認められる。しかし『紅紗灯』に見られる表象を一つの意味表現の体系とみなせれば、それがやはり「田園の憂鬱」との間に著しい類似が見られる。

第六章は 1930 年代後半から文壇に登場した左翼作家艾蕪の創作と佐藤春夫との関連を指摘してみた。まずはテキストの分析を通して艾蕪が戦時中に発表した短編小説「友誼」は国策小説「アジアの子」にめぐる佐藤春夫と郁達夫との葛藤を意識して創作した作品だという可能性を提示した。また艾蕪が 1947 年に創作した「田園二部作」（「都会の憂鬱」と「田園の憂鬱」）は佐藤春夫の「田園の憂鬱」と同じように都会と田園の二元構造の中で人間の憧れと幻滅を描きつつも、その「憂鬱」の原因を戦争と政治に求め、これは田漢による「田園の憂鬱」のプロレタリア的解釈の延長線上にあると考えられる。

第四部では近代文学から焦点をずらして、佐藤春夫における中国古典文学の影響を問題にした。

第七章では佐藤春夫の前期作品「お絹とその兄弟」と中国古典白話小説「売油郎独占花魁」との関係に考察を加えた。テキストの比較を通して、「お絹とその兄弟」は人物造形、場面描写、さらにプロットの配置などの面にみられる佐藤春夫の創意の背後には、「売油郎独占花魁」の影響が存在することが明らかになった。古典文学に「お絹とその兄弟」は手法や文体の面において「田園の憂鬱」と著しく異なるため、佐藤春夫の中村里時代の作品の中では異質な存在と見なされてきたが、中国古典文学との関連という視座を導入することによって、この作品と佐藤春夫の同時期の作品との間に外国文学を強く意識しているという点においてある程度関連性を見出すことができると思われる。

第八章は佐藤春夫の「秦淮画舫納涼記」を取り上げ、彼が作品の中で自身の懐古的な視線を問題化するメカニズムを解明した。佐藤春夫は「廃娼運動」によって風俗業が取り締りの対象となった秦淮を歴史上に王朝交代の際に寂れる秦淮に見立てて、自身の秦淮の旅をその没落の前の最後の栄華として追憶し、旅を思い出すことで古典文学に対する想起や詩の世界への没入によって懐古的な情緒に浸るが、その過程で彼は自分自身の持つ懐古的視線と近代中国との現実との間の矛盾を意識し始める。このように「秦淮画舫納涼記」は単なる旅行記ではなく、佐藤春夫が中国古典に向ける自身の視線を自ら分析した作品だということが明らかになった。彼は自ら記憶の中で中国古典との関係を意識的に求める一方、田漢など実際に南京に生活する人々の視線とのズレに気づき、自身の懐古的な情緒はすでに現実の南京からかけ離れたものだと気づく。芥川龍之介の「支那遊記」は近代化の外見から古典文学とかけ離れる中国の様相に気づくのだとしたら、佐藤春夫は同じ対象に向け

る自身と中国人の視線のズレから古典の世界の消失を確認したのである。彼の旅行記が訴えかけているのは、古典を思わせる風景が残っていてもそれに気づく感性はすでにその土地で生きる近代中国人の間から消えているという状況である。

以上の考察によって佐藤春夫と中国近代文学との関係の全体像を或る程度示すことができたと思われるが、その中にはまだ研究の余地がある問題が多々含まれており、それらの問題を今後引き続き探求していきたいと考えている。